

生徒を学びに向かわせるため、 私たちは「AL」を選んだ

2013年度より、各教師が自発的にアクティブ・ラーニングの導入を進めている長野県屋代高校・附属中学校。新しい授業形態を教師はどのように受け止め、そしてなぜ、その導入を選択したのか。「授業改善」という全ての教師が抱く思いを原動力にして、ゆつくりと、しかし確実に新しい道を歩いてきた同校の2年間を追う。

変容する生徒に対応し、 進学校の責任を果たしたい

長野県屋代高校におけるアクティブ・ラーニング（以下、AL）の導入の動きは、2013年度、進路指導部（現在のキャリア教育係）のある発信に端を発したものだ。それは「生徒気質に合った授業改善」だ。その当時、校内では「入学生の質的变化とその対応」が大きな課題となっていた。北島匡晃^{まさあき}教頭は「その頃既に、生徒たちの学力、そして学びに対する意欲が変わってきたという共通認識が教師の間にあった」と

振り返る。

「授業で『ここは重要だから覚えておくように』と繰り返ししても覚えられない。頭の中に入っていないといふ以前に、頑張つて覚えようとせず、すぐに諦めてしまう……そんな生徒が少しずつ増えてきたと皆が感じていました。私たちもプリントの内容を工夫するなど、授業改善を重ねていきましたが、それでも学びに対する意欲を高めることは簡単ではありませんでした。生徒に『勉強したい！』と心から思わせるような仕掛けが必要だと感じていました」（北島教頭）

生徒の入学段階からの気質変容、

そして学力の多層化はベネッセの「スタディーサポート」の結果からも明らかだった。当時の進路指導部からも「学習意欲と学力にこれだけ幅が生まれた生徒集団に、今までと同じ授業観で向き合い続けても、地域から求められる『進学校としての責任』を果たすことは難しい」と、非常事態宣言にも似た発信が盛んに行われるようになった。しかし、「では、どうするのか？」という問いに対して答えが見いだせてはいなかった。当時、教師が打てた策は、授業進度や課題の量の調整を検討するような対処療法的な手段であった。

長野県屋代高校・附属中学校

- ◎ 1992（平成4）年、県内の公立高校として初めて理数科を設置。2003（平成15）年にはスーパーサイエンスハイスクールに指定されるなど、地域の理数教育を先導。「質実剛健」「文武両道」を校是とし、部活動も盛ん。
- ◎ 設立 1923（大正12）年
- ◎ 形態 全日制／普通科・理数科／共学
- ◎ 生徒数 1学年約270人
- ◎ 2015年度入試合格実績（現役のみ）
国公立大は、北海道大、東北大、東京工業大、新潟大、信州大などに125人が合格。私立大は、青山学院大、上智大、中央大、法政大、明治大、早稲田大、神奈川大、立命館大などに延べ252人が合格。
- ◎ URL <http://www.nagano-c.ed.jp/yashiro/>

ALは授業改善のひと工夫 「これなら出来る！」

13年度の夏、進路指導部の宇都宮仁先生は、校外で開催されたキャリア教育の勉強会に参加し、そこで初めて「アクティブ・ラーニング」という言葉を耳にした。



長野県屋代高校・附属中学校 教頭
北島匡晃 *きたじま まさあき*
教職歴32年。同校に赴任して11年目。「粘り強く、柔軟に」



長野県屋代高校・附属中学校
宇都宮 仁 *うつのみや じん*
教職歴25年。同校に赴任して5年目。キャリア教育係主任教諭。「その気にさせ、努力の方法を示し、諦めさせない」



長野県屋代高校・附属中学校
近藤信昭 *こんどう のぶあき*
教職歴30年。同校に赴任して6年目。SSH主任。「基本を大切にし、自分の頭で考え、自分の言葉で表現させる」



長野県屋代高校・附属中学校
伊藤雄基 *いとう ゆうき*
教職歴24年。同校に赴任して5年目。「楽しくなければ学校じゃない。楽しくなければ授業じゃない」



長野県屋代高校・附属中学校
駒井健吾 *こまい けんご*
教職歴5年。同校に赴任して6年目。「外の世界にアンテナを張り、生徒と共有しながら学んでいく」

「生徒自身の能動的な学習」であるALに初めて接して、『これなら、幅広い学力層が存在する本校の生徒にも対応できる！』と確信しました。主体性や協働性を高めるALは、キャリア教育という側面から見ても魅力的でしたし、既に様々な進路行事を行っている中、これ以上新たな行事を増やすことなく、高校教育の本丸である授業のやり方を変えることで、変化する社会を生き抜く力を育むという考え方が、とても合理的に思えたのです。そして、ALを根付かせることで、学年や教科の枠を超えた共通の指導の軸をつくることが出来ると考えました（宇都宮先生）

勉強会の報告を聞いた当時の校長は宇都宮先生の考えに賛同し、「早急に校内で共有してほしい」と指示した。そして、ALとの出会いから3か月後の13年11月、授業改善に関する研修会で、宇都宮先生が講師になり、自身が校外の勉強会で見聞きしてきたことを同僚に説明した（図1）。「勉強会の後、自分でALを研究するうちに、これまで自分たちが授業

図1 校内研修会で初めてALを同僚教師に紹介した文書

1、フォーラム参加への経緯

- ① この数年、自分の授業で強く感じていることや悩み。
 - ・生徒の変化、学習内容定着度の低下
 - ・生徒の変化だけが理由か？
- ② 昨年度 中学部、伊藤雄基先生とともに高校1年を担当しての実感
 - ・「高1ギャップ」を埋めるだけではない効果
- ③ 「進路指導」だけではない「キャリア教育」の重要性。(資料①)
 - ・2つのLIFEとは。→自分の将来の①()と②() (資料②)
 - ①の力を養成する「キャリア教育」。②の力を養成する「アクティブラーニング」

2、「アクティブラーニング (AL)」とその必要性

- ・「AL」とは (資料③)
- ・具体的にどのような「授業・学び方」のことをいうのか (資料③)
- ・「AL」実践の生徒と教師の感想 (資料②③)
- ・「AL」の課題 ～あくまでハイブリッドで～ (資料③)
- ・定着度の向上、学び別平均定着率 (資料④)
- ・大学や企業でも求められる「現代的能力の3要素」(キー・コンピテンシー)とは (資料⑤⑥)

3、で、フォーラム参加後の自分の授業では

- ・教科書読解中の問い、問題集・考查返却後の答え合わせの場面での実践 (時間がかかる)
- 個人学習→グループ学習で教え合い解答制作→発表・比較→授業者の正答例提示と比較
- ・(前任校では) 高3生11月「大学入試問題を作成し模範解答を作る」のグループ学習実践

4、今後の提案 (実践中であると存じますが)

- ①、実際にプロの「アクティブラーニング」実践セミナー講師をお招きしましょう(笑)。そして、お互いの授業を参考にする機会を増やし、「感想」を述べ合うことも。
- ②、教科の特性もあります。5分、10分、毎時でなくとも「生徒自身が動く時間」の設定は？
- ③、すべての教科で毎回の「考查の設問」を見直しませんか(六埋め問題+α論述問題も必出題)

*宇都宮先生が作成した文書を編集部が一部改編。

でやってきたことと全くの別物というわけではないことが理解できました。もちろん、ALにおける様々な指導手法を学ぶ必要はありますが、従来の指導内容に、生徒が話し合ったり、発表したりする場面を入れるだけでも授業は変わってくると思います。だから、校内研修会でも先生方に『こういった活動を少し授業に加えてみるだけです』と自信を持つ

で説明しました（宇都宮先生）
新しい授業設計の考え方を伝えるなら、専門知識を備えた外部講師を招いてはどうかという声も一部にあった。しかし、それをしなかったのは、まずは同僚だけの研修会で、授業改善へのモチベーションを高められたからだと宇都宮先生は話す。「本校の事情を十分に把握しているわけでもない外部の人に、聞いたこ

ともない教科指導法を勧められれば、自分が培ってきた指導法を否定されたように受け止める方もいるかもしれません。そこで、まずは校内で定期的に実施してきた授業改善の研修会の中で紹介し、関心を持ってもらうことを目指しました」(宇都宮先生)

実際、宇都宮先生の説明を聞いた同校の教師たちが抱いたALに対するイメージは、「それほど難しいことではない」「これまでの授業にひと工夫加えるだけ」といったものだったと、近藤信昭先生は振り返る。

「ALという言葉を知る前、つまり一斉授業が基本だった頃から、私も『ただ聞くだけでなく、自分の頭で考えることが大事だ』ということは分かっていたし、生徒が生き生きとしている授業をしたいと常々思っていました。ALとの出会いによって、その願いが実現する可能性が高まったと感じました」(近藤先生)

宇都宮先生がALの可能性と、更なる授業改善の必要性について語る中で、他の教師からは同校の体育科の取り組みが紹介された。体育科では既に授業改善の一環として、体育指導の様子を動画に記録し、授業後、

それを体育科内で共有する取り組みを行っていたのだ。

「体育科では、教師同士が昼ご飯を食べながら、指導の様子を撮影した動画を見て意見交換していると聞いて、私は『なんだ、授業改善の大きな一歩は、既に校内から始まっているじゃないか』と感動しました。全ての教科で教師同士が学び合えば、ALのスムーズな導入もきつと可能だと思いました」(北島教頭)

校内研修会が終わる頃には、何人かの教師からは「今度、私もやってみようかな」という言葉が聞こえてきた。そして、何日もしないうちに、授業中、ガタガタと机を動かす音が校内のあちこちから聞こえるようになった。

個々の工夫から始まり 教科ぐるみの活動へ広がる

翌14年度には、ALに造詣(ぞうけい)の深い他校の教師を講師に招き、実践的ノウハウを交えながらALについての講演をもらった。5分程度のAL先進校の授業ビデオも紹介したが、教師の反応は、「これなら自分にも出来そうだ」といったものだった。

その頃、既に教師の中には個人レベルでALに挑戦する者もいたが、14年度9月からは、宇都宮先生が属する3年生の国語科で、ALを導入することになった。

「素材文のみを載せた京都大の現代文の入試問題を配布し、生徒がグループになって設問を作成するという授業を行いました。また、グループでつくった入試問題の解答を、過去問題集の解答例や私の解答例と比較し、どれが一番良い解答かを皆で話し合うというスタイルを、入試直前まで繰り返しました」(宇都宮先生)

同校は、14年度センター試験の国語で下位層が減少し、上位層が拡大する好成绩を収めた。「その結果がALの成果かどうかは分からない」と断った上で、宇都宮先生は続ける。

「生徒が考えたり、話し合ったりする機会が増えたことは、少なくとも、伸びるための土壌にはなったのではないでしょう」(宇都宮先生)

ALとの出会いから3年目の15年度は、更に各教師がALの実践を重ねている。そして、かつて大きな課題と認識していた生徒像が、少しずつ変化していることを英語科の駒井

健吾先生も感じるという。

「確かに、最近の生徒は知識を統合してアウトプットする能力が低くなっています。だからこそ、与えっぱなしで授業を終わるのではなく、教わった知識をALで活用させることで、本物の知識として定着しているように思います」(駒井先生)

AL導入による高校の授業の変化は、同校附属の中学校の教師にも影響を与えている。国語科の伊藤雄基先生は次のように話す。

「私は、高校のALの授業を見ることで、『中学校でももっと意図的に、課題を持って話し合わせよう』といった意識が強くなりました。以前から、感想を話し合う程度の活動は授業で行っていましたが、高校の授業を参考に、『教科書の文章を読んだ後に、テスト問題と解答を班ごとにつくる』といった、生徒の思考を深める活動を意識するようになり、中学校のALが確実に変わりました」(伊藤先生)

ALは教師が意図的に 使いこなすツールである

同校がAL導入による授業改善に取り組み中で、解決すべき新たな課

宇都宮先生の3年生の現代文の授業。生徒の話し合いに耳を澄ませることで、「今、生徒は何が分かっている、何が分かっているのか」をリアルタイムに把握し、生徒の理解度に応じて柔軟に授業を構成していく。生徒は、同級生の説明に一生懸命に耳を傾け、「分からない」「違う」などと率直に語る。「教師が一方向的に教える授業では、『実は聞いていなかった生徒』は必ず出てくる。そういった生徒を見逃したくなかったから、私はALを選択しました」(宇都宮先生)

題も見えてきた。

「人とかかわりながら学ぶことが苦手な生徒をどのように巻き込みながら、授業をつくるかは大きな課題であり、まだ答えは見えていません。そのような生徒に対しては、発表が出来ない分、提出物に書いた内容をしっかりと評価するといったことをこれまで以上に心掛けるなど、試行錯誤しています」(宇都宮先生)

「ALに懐疑的な教師の中には、生徒が授業とは関係のない話をしたり、ざわついたりして混乱するのではなにかと心配する声もありますが、本校の生徒を見る限りそれは杞憂(きゆう)でした。むしろ、教師が発問のレベルを間違えると、生徒が途端に話さなくなることに注意すべきです。理解の状況を見極めながら、慎重に発問する必要ががあります」(駒井先生)

「AL導入で授業進度は遅れなかったか」という問いには、「生徒の発言を生かしながら授業を深めると、面白くなり過ぎて、予定通りに進まないこともある」と近藤先生は笑う。

「授業を更に面白いものにしなが

ら、進度を維持する手法をもっと勉強したいです」(近藤先生)

「授業中に寝る生徒は確実にいなくなりまし、静かに授業は聞いていられるけれどもテストでは点が取れない生徒も少なくなりました。他の生徒に説明するために、積極的に辞書を引く姿も当たり前のように見られます。従来の授業スタイルに戻り始める必然性はありません」(伊藤先生)

同校では今年度、ALについての理解を更に学校全体で深めるため、高校の教師全員が附属中学校の授業を見学することを計画している。

「生徒の課題を皆で認識した上で、授業改善策の選択肢としてALが提示されたから、そして、入試のためだけでなく、自ら考え、自ら学ぶ人材を育てたいというキャリア教育観を土台にしたから、ALが先生方に受け入れられたのです。私たちは生徒を育てる手法の1つとして、ALを手にしたわけです」(北島教頭)

目的を明確にし、能動的に授業をデザインする同校教師の挑戦は、これから続いていく。